開　会　挨　拶

滋賀県琵琶湖環境科学研究センター長
内藤　正明

貴重な角野先生のご講演の時間を数分いただいて、ご挨拶申し上げます。

たまたま私、ただいまセンター長というような役目を仰せつかっております。挨拶をお引き受けしましたが、実は工学屋ということで、こういう分野は門外漢でありますけれども、数日前に手に取った桑山さんの「環境の哲学」というのを見ておりまして、私など工学屋というのは、自然生態系というものと、いかに決別して人工的な空間を作りあげて、その中で便利に快適に暮らせる社会を作るかということをもっぱらやってきたんであるなあと、改めて思い至りました。

特に、この琵琶湖なんかでも、守るために流域下水道を大々的に作ればいいんだというような発想で 40 年程前に関わったということが、琵琶湖との関わりの最初でございましたが、それで作り上げた下水道が、いったい琵琶湖にとって何だったのかということは、その後ずっと問いかけられてきたように思います。

我々が良かれと思って作ってきた、人工的なそういう空間や施設が、いったい、何をもたらしたのかというのが、桑山さんの、本の中に、非常に哲学的に深い意味で書いてあります。

我々の存在自身というのが、もうそういう長い風土、歴史との関係においてしか、そのアイデンティは確定出来ないものである。西洋流に自我とか、自己確立とか哲学の中で、環境や自然から切り離されて存在するというような哲学の下で作り上げて来た社会とは何であったのかということを根底から、問いかけているように思いました。私も、改めて工学屋として、してきたことの根本的な反省を、今になって持った次第です。

もう一つ、先般のシンポジウムで、日高先生に今の地球環境のこういう状況について、「どう思われますか？」とお尋ねしたら、「この京都の国際会議場、この立派な建物は元々は非常に豊かな自然の森だったんだよね。」とおっしゃって、「こういう中にこんな建物建てて、この中で暖房しながら、こうやって地球環境の話をしてるんだよね。」とか言われました。その時は私も一瞬戸惑いましたけど、そのあと、先生の言われたことが、我々がやってきたそのこと自身が、今の危ない、地球や環境や生態系の危機をもたらしていることを、婉曲に指摘されていると気がつきました。ですから、ここでお願いしたいのは、私たちがやってきた小手先の技術みたいなもので、外来のこういう生物の問題を対処するっていうようなことでは、駄目で、根底的に人が自然生態系と一緒に生きるとは、どういうことなのかという、本来先生方の一番根底にあるところから、今回のこの外来種の問題につながってご議論いただいて、それを我々、誤り多き工学者に、こうしなさいというふうに言っていただくと、大変嬉しいと思います。

そういうようなことを期待しつつ、この会のご成功をお祈りしたいと思います。つたない話で、時間を取りました。以上でご挨拶に代えさせて頂きます。